人生の舵を取る

――制作を再開した作家たち

中尾英恵　文

ものをつくることを志向する人でも、就職やライフステージの変化などによって、制作から離れる人も多い。様々な経験を経て、制作活動を再開した4人の作家を例に、作品を制作することと生きることの多様なあり方を考える。

藤崎了一は、長きにわたってSANDWICHのテクニカルディレクターとして、学友であった名和晃平の作品制作に携わってきた。仕事と制作の両立の難しさから、10年ほど自身の制作をしていなかった藤崎であるが、盟友である藤元明の機転によって、名和が企画したグループ展への参加が決まり、自身の作品制作をする。そこで、自分の作品をつくる面白さと必要性を感じ、2015年に独立、制作と発表に猛進している。物を壊していくパフォーマンス《crash addict》や《colored oil》の写真作品のアイデアの原点は10年以上前に遡るが、SANDWICHで経験した「制作に関する粘り強さやしつこく考え続けること、集中する強度」が如実に反映された作品となっている。

郵便屋さんに「ありがとう」を伝えるプロジェクト作品やアートとスポーツを通したコミュニケーションの場として運動会を主催するなど、コミュニティーに潜入するような活動が学生時代から注目されていた山本麻紀子は、結婚を機に制作から遠ざかった。夫の仕事でロンドンへ渡り、こっそりと抱いていた「ものをつくる」ことへの情熱がロンドンの地で沸騰し、落とし物を介したプロジェクトを始める。水戸芸術館にプレゼンを行い、翌年、独りで帰国しクリテリオムでの個展を開催する。制作から離れていた期間によって、流行に左右されない強い意志を得たという山本は、13年から巨人を基軸にした長期的なプロジェクトに着手し、19年の「巨人サミット」に向け、加速度をあげている。

16年に「第2回CAFAA賞」を受賞した松下まり子は、大学院試験に落ちた後、絵画制作を休止し、文章を書いていた。数年後、偶然の人との出会いによって、絵をイチからやり直すことにした。その後のイラストでの受賞や、絵が引き寄せる人々との出会いによって、「ああ、絵を描いていいのか」と自己表現の方法を見つけたように思った。絵画を再開したことで改めて他者と「話ができる」と感じた松下は、「あらゆる絶望に色を塗りたい。地獄を覗き込んで恐れることなく胸を躍らせていたい」とこれからの人生を語る。

壮大で静寂なインスタレーションを制作する久門剛史は、卒業後、ファッションブランドとデザイン会社でクリエイティブ職に携わった。プロ集団での仕事は面白さとやりがいがあり、5年ほど個人の作品制作から離れることとなった。震災を機に人生を再考するなか、美術作品へと気持ちが向かい、「shiseido art egg」や国際芸術センター青森の公募レジデンスへの応募を取っ掛かりに個人制作を再開した。「企業での時間は、自分を俯瞰して見る時間であり、適度にアートから離れたことが、美術に固執しない柔軟性をもてた」と言う。また、プロの現場での仕事は、制作における意

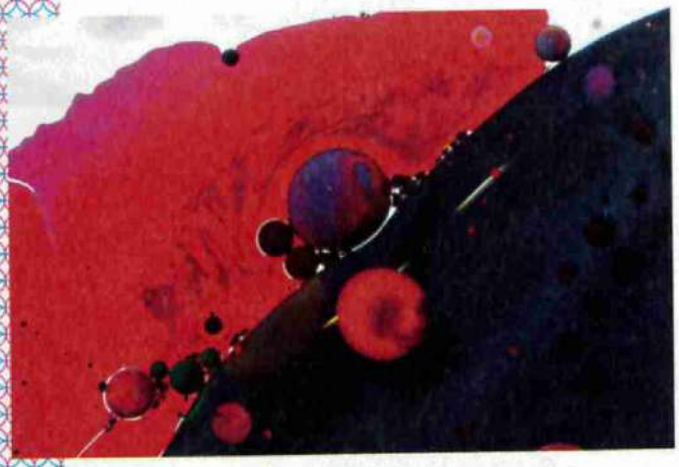
■『美術手帖』2016年12月号

山本麻紀子 MAKIKO YAMAMOTO B 1979,Kyoto

だいだらぼうとホリバーン―水戸のお土産をホリバーンに届けよう
2014年10月　イギリス・ペンザンスでのワークショップの様子

松下まり子 MARIKO MATSUSHITA B 1980,Osaka

Margarita7　2015　キャンバスに油彩　100×80cm
© Mariko Matsushita　Courtesy of KEN NAKAHASHI



藤崎了一 RYOICHI FUJISAKI B 1975,Osaka

colored oil 088　2016
アーカイバルピグメントプリント　73.1×110cm
© Ryoichi Fujisaki　Courtesy of KANA KAWANISHI GALLERY

久門剛史 TSUYOSHI HISAKADO B 1981,Kyoto

PAUSE 2016　「あいちトリエンナーレ2016」での展示風景
写真＝怡土鉄夫

識改革や技術的な向上と広がりをもたらし、精巧な装置によって人間が本来的に持つ知覚を触発する現在の作品に影響を与えている。

美大の中には、「美術に関わらない＝落ちぶれた」といった空気が少なからずある。あるときに美術を志ざした者が集まるのが美大であるが、生きていくなかで、興味や大切なものは変化するだろう。今回取り上げた4人は、自分にとって作品制作が必要だと思ったときに、制作を再開した。本コラムで伝えたいことは、制作を再開することが正しいということではなく、自分が思ったときに人生の舵を取る勇気や可能性、芽生えた情熱を思いっきり燃やしてみる、ということである。本コラムが何かしらの原動力になれば幸いである。

● Profile
なかお・はなえ　小山市立車屋美術館学芸員。1981年生まれ。担当する展覧会「朝海陽子展 生成する風景」が11月23日まで同館で開催中。